

子どもの発達と幼稚園教育の課題

(研修俯瞰図 C 分野)

主題設定の理由

「幼稚園教育要領総則」冒頭には、「幼稚園教育は幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」と示されている。また、「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること。」ともある。

ここでいう「幼児期の特性」とは、2歳・3歳・4歳・5歳児それぞれの年齢で段階的に見られる幼児の姿のうち、特に身体能力・ことば・あそびの傾向・社会性・知的育ちなどについてのことである。

「幼児期の特性」というと、幼児教育に関する専門の研究者の立場であれば、単にデータや数字を示して「このような特性がある」と説明したり、方向性を提示したりすれば済むこともある。しかし、保育現場ではそれだけには終わらない。

単なる発達状況の把握から一歩ずつんで、実践をするのが保育者である。子どもが見せる発達の特性を踏まえ、次の段階に進めるように、発達の課題に沿った援助の在り方を工夫したり、環境を設定したりする。

特に、満3歳児は学齢で言えば2歳児になる。現状の満3歳児保育では、3歳児との混合保育であったり、3歳児の指導案を希釈した形で展開したりするように見聞きする。しかしこの場合も、発達の連續性の視点から、2歳児にとって必要で十分な観察研究と、それにもとづく実践が必要である。

つまり保育の実践とは、子どもの特性を知り、理解するところからスタートする。その上で、日々、向かい合う子どもたちの総合的育ちがスムーズに達成されるために、個の特性と集団の特性を押さえた保育を展開することが望ましい。

従来、自由保育・一斉保育・縦割り・横割りといった保育の形態が各種あるが、異年齢保育も一つの保育の形態である。これらのそれぞれの形態による保育の、効果的な展開のためにも、発達の特性に沿った指導計画を作成し、その実践のための環境を構成することが大事である。

また、預かり保育は、教育課程外の保育と位置付けられたが、通常の保育の延長であって良いのか、ただ預かっておくだけなのかなど、預かり保育の内容についても考察を加えるべき時期にきている。

さて、子どもを取り巻く社会や生活環境は、急激な変化をとげつつある。教育を取り巻く状況の変化を考慮しつつ適切に対応して行くためには、幼児教育実践者自身が

その意識を新たにする必要もある。保育者自身の主体的な保育への取り組みが、時代への対応としても強く求められている。

保育者の資質向上を目指した研究研修が日々行われ、実践者である保育者のチームの在り方についても従前より議論されてきた。保育者の同僚性、チームを形成する保育者の一人一人異なる能力・個性・持ち味等を生かしたチーム保育について、さらに検討を進める必要がある。

この「研修俯瞰図のC群」では、発達理論と保育実践について示唆しているが、これらを参考にしながら、さらに自分の地区や自分の園にとっての課題は何か、また、何がもっとも大切であるかを考え、その上で、今日的課題の研究テーマを設定することが必要である。

【研究の手がかり】

五領域の視点からみた発達に加え、社会性・道徳性などと関連させて、子どもの育ちを考える。

発達の連続性を考慮した上で、保育の在り方、子どもの生活や育ちについて考える。特に「心の育ち」については、年齢的な育ち、思いやり等も含む知性としての育ちについて考える。

社会の変化・地域の変化・家庭の変化という、子どもを取り巻く環境変化の中での、子どもの育ちや保育の関係について考える。

子どもたちの顔、体格、性格が一人一人違うように、保育をする保育者も一人一人が違っている。その違いを包含する保育の形態や在り方について考える。

単一でなく多様な価値観があふれる社会環境の中で、子どもの発達と生活また、家庭等との関係性を考える。

（分科会等テーマ群）

協同的なあそびと学び

2歳児の発達と満3歳児保育の在り方

3・4・5歳児の生活と5歳児の育ち

子どもの発達とさまざまな保育の実践

社会性の育ちと子どもの規範意識の芽ばえ

心の育ちと保育

学びの連続性を考える保育

発達理論と現代の子ども

各地区独自の課題